

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 23 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04552

研究課題名(和文)脳性麻痺児の「個にとっての意味」を重視したライフ・ベースト・サポートモデルの構築

研究課題名(英文)A life support model that emphasizes individual meaning with CP child

研究代表者

吉川 一義 (Yoahikawa, Kazuyoshi)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：90345645

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、脳性麻痺児をより自律的な生活者へと育てるためライフ・ベースト・サポートモデル(LBSM)を提唱し、その定式化を試みた。

その成果として、従来の障害診断と教育的アプローチに、生活履歴(ライフ・ヒストリー)という当事者の通時的側面の情報を加えることで、介助者には対象に即したより包括的な支援の視点を、そして、脳性麻痺児には自律的な判断の機会を提供する手続きを組み込んだサポートモデルを構築できた。

研究成果の概要(英文)：In this research, we propose a life-based support model (LBSM) to nurture a child with cerebral palsy more autonomous, and tried to formulate it. As a result of that, by adding information on the temporal aspects of the parties' lifestyle (life history) to conventional fault diagnosis and educational approach, caregivers can provide a more comprehensive support viewpoint, And a cerebral palsy child could build a support model incorporating procedures to provide autonomous judgment opportunities.

研究分野：特別支援教育

キーワード：ニーズイメージの具体化 活動の遂行 既有知識の更新 自己認識の更新 自己決定能力の向上

1. 研究開始当初の背景

本研究は、H18～H23 年度に実施した基盤研究(B)の発展であり、個の生活の状況に対する意味に着目し、障害事例の類型化を「個別性とは何か」という視点で補完するものである。実践活動に目を向けるとき、「個別の教育支援計画」と実践は、「個別」としながらも障害種に共通する特性への対応となっている例が散見される。

データにもとづく共通特性の重視は根拠ある効率的な支援に不可欠であるが、個にとっての意味と乖離しがちであり、学習の自律性と効果に負の影響をあたえる。すなわち専門的知識から有効な課題を設定しても、本人が「自分にとっての意味」を見出せなければ、それは選択肢の制限に過ぎず、彼らが自発的に選択することを難しくしてしまう。他方、優れた実践では個の特性を重視して支援の成果を一定あげてきたものの、知見が相対化されないために実践者間で共有できず、かつては臨床の知と注目されながらも、職人芸と揶揄されてきた。こうした状況に直面するとき、現在求められていることは、データによる類型化と現場で重視される障害者の個性との有機的な結合であることは明らかだろう。そこで、以前の基盤研究で得た知見をもとに、脳性麻痺児の支援により効果的で、本人の自律性を促すような方策が必要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、脳性麻痺児をより自律的な生活者へと育てるためライフ・ベスト・サポートモデル(LBSM)を提唱し、その定式化を試みたものである。

彼らは幼少時から介護者が存在するために、運動機能の物理的補填が日常的に行われる一方で、この介助行為が本人の自己決定までも奪ってしまうことがしばしば発生する。また、データにもとづく障害診断とそれに即した対応は効率的な支援とその根拠に不可欠であるものの、逆に当事者の将来の選択肢をあらかじめ制限し、自律的な決定の機会を喪失させる傾向も懸念される。これより、本研究は従来の障害診断と教育アプローチに、生活履歴(ライフ・ヒストリー)という当事者の通時的側面を導入し、介助者にはより包括的な支援の視点を、そして、肢体不自由児には自律的な判断の機会を提供するサポートモデルを構築することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、以下の3つの検討課題を設定して実施した。

検討課題(1)「個にとっての意味」の解釈を再検証し、これへの介入手続きを解明する。「個にとっての意味」(重要度評価)に関与する自己認識は、状況への行為可能性の判断

に関わり活動性に直接作用する。そして、自己認識に影響を与えるのが状況を理解するための知識であり、知識は目標への達成にも影響する。特に活動性の低い事例の自己認識を改善するには、知識への介入が必要である。例えば、このような事例では知識を至難な内容として想定していることも多い。この場合、知識を適正な内容に修正することで、自己認識と効力感が変わり活動性が改善されることが予想される。これより、自己認識の評価を過大・適正・過小の3つ、そして、知識の内容を、安易・適正・至難の3つに分け、意味の状態はその交互作用として9つのタイプ(3×3)に整理できる。これより、上記タイプごとに、実践適用をとおして個にとっての意味を再検証し、介入と解釈の手続きを明らかにした。

検討課題(2)前項の結果を踏まえLBSMの原型を作成した。「個にとっての意味」を解釈する手続きを、従来の心理教育的診断から支援の過程に位置づけた原型を作成した。この原型は、対象者の当該課題への自己認識と知識の持ち方から効力感を診断し、これにもとづいて学習や生活で取組む課題と支援の留意点を企画・組織する。これにより、「個別の教育支援計画」から「個別の指導計画」への策定と実践の連続性を担保するものである。

検討課題(3)原型の実践検証を経てLBSMを定式化した。実践検証は、その対象を障害の程度・年齢・生活条件などが異なる者へと漸次、拡大しつつ修正を加えた。

4. 研究成果

(1)脳性麻痺の共通特性からは、一般に彼らは心身機能・構造レベルの運動障害が原因となり、個人の活動レベルで学習を含む生活上の行為に制限を受ける。これが、他人との関係やコミュニティへの参加を制約することを確認した。

(2)運動障害が同程度の脳性麻痺でも、対人志向性が強くコミュニティに積極的に関わっている者とそうでない者では、活動の制限に違いを認め、活動性が高い事例では諸機能が使われて機能障害自体も変化する(改善時には、機能の誤用による改悪)ことを確認した。すなわち、個人の生活とその履歴は活動制限に影響し、また、活動制限はその後の生活と障害に影響した。これより、彼らの「個別性」を理解するためには、活動制限を見ていくことが重要と思われ、活動性を向上させて活動制限範囲を狭めるように突詰めることは、直接的に彼らの生活と機能を豊かにし、また、この限界の同定が従来のデータによる類型化と個別性の有機的結合になると考えられた。

(3)活動制限をとらえるには活動性の測定が必要であり、それは見かけ上の活発さではなく個人を行動へと向かわせる動機の質と程度を捕捉することである。このため、活動性を自己管理行動の動機としてTSRQ (Treatment Self-Regulation Questionnaire) で評価したところ、他律的、時には無気力な状態にあり、活動性の低下に陥っている事例がしばしば認められた。

(4)このような事例のライフ・ヒストリーには、“せかされ・頑張らされる”経験が共通し、その内省から自己認識は障害のない友人と比べて能力の劣弱さを認識し易く、不当に能力を低く評価する傾向にあった。自己認識が低い対象世界への効力感が低下して「できる実感」が持てず、行為しないとわかった。そして、活動性の低い事例では不十分に行為する経験が対象世界への関与を断片化して、達成できない不全感の慢性的な蓄積と断片的な知識の獲得が危惧された。日々「できない」と感じてきた彼らの活動性低下は、容易に改善できなかった。

(5)他方、自律性が高く、活動性も高い事例の自己認識は自分に可能なこととそうでないことに分けられ、「こうすれば可能かもしれない」など、対象世界への行為方略を含めた予測を有することを特徴とした。加えて、“自分の”運動障害に即して対象世界を定義する仕方では知識を構成し、これにもとづいた行為方略を有することがわかった。ライフ・ヒストリーからは、運動障害のためにできないことや失敗体験が語られる中で、課題完遂の経験と達成の実感から、効力感を得てきたことが語られた。つまり、自己決定感をともなう行為とその達成が有能感をもたらし、これらの結果から得た知識の持ち方が対象世界に行為を向かわせると示唆された。

以上のことから、活動性向上には、個人が生活の通時的側面を通して形成してきた対象世界への意味(重要と評価する事象や活動・目標)に介入した支援が重要かつ有効であった。

(6)従来、脳性麻痺児への支援研究において、「個にとっての意味」が主要な行動動機とされながらも、取り扱いの困難さからこれに焦点化されたものはない。本研究は、これを中核として活動性の向上を目指したものである。この知見は、活動制限の観点から多様に顕在化する障害像を突詰めて同定することで、「障害とは何か」との本質に迫ることに寄与できると思われた。教育には、個別の教育支援計画に個別性が反映されず、実践との乖離が生じた計画はすでに形骸化した現状にある。これに対して、対象児の個性が反映されたカスタムメイドの支援が可能となり、自らの意味にしたがった生活による機能の高まりと、自己実現に向けた自律的な生活

により QOL の向上が期待された。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)
吉川一義、重症心身障害児のリーチングと視覚的注意の関係、特殊教育学研究、査読有、56(1)、2018、-

吉川一義、重症心身障害児の空間への視覚的注意と姿勢・運動調整の関係、特殊教育学研究、査読有、55(5)、2018、-

〔学会発表〕(計 1 件)
太田博己、吉川一義、脳性麻痺児の主体発揮に関する問題、第 55 回日本特殊教育学会、2017

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1)研究代表者
吉川一義 (Yoshikawa Kazuyoshi)
金沢大学・学校教育系・教授
研究者番号：90345645

(2)研究分担者
()
研究者番号：

(3)連携研究者
()
研究者番号：

(4)研究協力者

野口 一人 (Noguchi Kazuhito)

矢本 聡 (Yamoto Satoshi)

太田 博己 (Ohta Hiromi)

矢島 卓郎 (Yajima Takurou)

滝川 国芳 (Takikawa Kuniyosi)